

庄川町松原遺跡発掘調査中間報告



庄川町教育委員会

古



遺跡発掘調査中間報告書

庄川町教育委員会

はじめに

当町松原地内の縄文時代遺跡については、早くから考古学界の一部に知られてはいたものの、地元における調査や研究が業外とぶくれ、地元民による組織的、体系的な研究は皆無に等しい状態であった。金屋遺跡、示野遺跡、青島遺跡、松原遺跡などと、それぞれ研究者によってその呼称さえ一定されていなく、あるいは井波町との境界線近くのボンボン野遺跡とも混同されたりして、実際にはその所在さえも厳密には確認されていないような状態であった。(オー図)



第1図

ボンボン野遺跡は岩黒地域に於けるそれと共に、以前多くの土器の出土を呼んで伝えられるもの、田和初集における電線開発によって、金屋反保一帯の崩田作業が著しく進捗し、現在ではほとんど水田化し、出土器の発見はおろか、昔のよすがを掘るにものもない状態となっている。

松原遺跡も旧庄川の河岸段丘上に成立した遺跡であり、現在は新用水の上に広がる台地上に細長く延びる地域一帯である。この遺跡については大正の初め、加越線敷設工事に際して数多くの土器石器等の出土品を見てその後について学界からも注目されていたといわれている。ことに戦後になってからは一部の郷土史家や作家、あるいは美術愛好者などによって意欲は発掘乱掘、あるいは採集などが行われ、貴重な文化財がなんら調査、記録などの公開されることなく毀滅する状態となっていた。なかには完全に近いまでに復元され收藏されたり、また学界の研究に多大の貢献をしているものもあるが、その数は極めて少ないといわねばならないのが現状である。

しかも、土産の崩発が意欲に進むに従って遺跡の新設や破壊、あるいは住宅地の造成、水路の改修などによってこの貴重な埋蔵文化財が、これ以上荒廃破壊されるを見るに促す、文化財保護の気運の向上と相俟って当町美術協会、庄川中

学校ならびに町内有志者各位の助力を得、富山県考古学会理事岡崎印一先生の御指導のもとに、昭和43年初めて本格的に組織化された発掘調査に着手したのである。

遺跡の範囲



第2図 富山町

当町示野神明宮の国道156号より青島のヤ一橋物産へ抜ける町道25号線が横切る新用水に沿った河岸段丘上すなわち、現在ある青島墓地あたり一帯がその遺跡の包含地と推定される。(第二図)ことに遺物散布濃度は、町道25号線より北方にのびる台地に著しく、発掘地B地区の西北(I)は当町恒田氏の旧屋敷跡と伝えられ、かつては旧家においても、豊墓石土器が採集

されたところである。また墓地と町道8号線との間の南半(O)地帯において採集復元されたと伝えられるものも現存している。

またこの台地には発掘地B地区とC地区の西北方に一段低く表土をけずりとられたところがあり(H)これは大正の初め、加越線を敷設した際に採土されたところで、このあたりからも多くの出土品をみたといわれている。

このほか第2図(H)付近は、最近水田化のために土地が低められたところであるが、このあたりの断面にも多くの土器片が含まれており、また町道25号線の南側では(=)付近にも遺物を多く包含するところがあるといわれる。

以上の状態からみて、この遺跡は粗長く突き出された台地を利用して発達したかなり豊かな部落のあとと考えられる。しかし、詳細についてはさらに今後の発掘調査や分析調査などを本格的に実施して解明すべきであろう。

発掘経過

7月17日(水)

岡崎印一氏、現地調査

発掘調査の方法について検討、仮議、具体的日程を決定する。

7月27日(土)

発掘準備打合せを町役場で開く。

7月28日(日)

地主の許可を得てA地区の試掘を開始する。このA地区は以前に盗掘されていらない貴重な箇所であった。三箇所を選んで「つば掘り」を行うも出土遺物は皆無。

以前に発掘された形跡のあるところは、やはりそれだけの規模があったので遺物も包層としての価値もやはり大きいことを確認させられる。

このA地区の発掘調査を中止することに一決し、B地区を選ぶ。

7月30日(火)

B地区の地主に了解を求める。

この地区は、以前より乱掘された形跡もあるが、それだけに遺物も包層が多いと考えられる。

8月1日(木)

作業分担、行程表、調査方法について協議。

とくに記録方法について再検討する。

8月2日(金)

用具の準備、点検。

8月3日(土)

B地区(約170m²)の発掘調査。

除草、測量、地割り作業の後、試掘トレンチを入れ発掘に着手する。掘り下げは「縦はぎ法」を原則とした。これは排土しておく土地の余裕がないためのやむを得ない措置であった。

現地は砂質土のため、深く掘り下げるにしたがって土砂崩れのおそれがあり、それに配慮せざるを得ず、作業も予定通りには進捗しなかった。しかも、包含されている石などの移動状態によってみるに、乱掘された後が歴然としており、土層位の判定は極めて困難、かつ不可能視されるくらいであった。しかも、この状態は今次発掘の全行程を通じてつきまとった最大の難点となり、時には層位の判定を未確認のまま作業を続行しなければならぬこともあった。これは予想されてい

たことでもあったが、現実に対つてみて関係者一層かどく落胆したことであった。

土器破片を主として遺物数十点採集。

これも前に盗掘にあっていられるため、ほとんど目ばしいものもなく、期待していた人々を落胆させた。また、石番は調査の最終日までも殆んど見られなかった。これは、盗掘によるのか、あるいは当遺跡の特殊性となるのか、今後の研究に俟たなくてはならない。

8月4日(日)

昨日のB地区発掘部分を掘り下げると共に、トレンチの方向を別の二方向へ延長する。この二箇所は、層序、遺物の埋没状況等を基に判断し、比較的破壊度の低いものと考え床面を下げることにする。

④ B地区内北東方向、隅の部分は、土器破片多数出土するも、一方は農道に隣接し、さらには、新用水への傾斜地にかゝるため作業不可能と考え、最終的には、生活面と想定される段階で作業を中止する。

(この部分周辺から用途不明の石が数点出土。或いは石囲みの炉の廃絶後、抜きとられた石とも考えられ、住居址並びにその関連箇所の可能性もあったが、この日、後述するところの炉跡発見をみたため、作業日程の余裕が少なくなり、埋め戻すことにする。後日、再調査を要するものと考えられる。)

⑤ トレンチをのびした別の一方向、B地区内南西方向の一隅から、土器破片多数出土し採集す。しかし、この箇所の一方向は農道であり、他方は別の地主の所有地であるため、埴土の都合悪く、作業続行不可能。(こゝは、作業進行と共に一部が住居址にかゝることになつたので、後日、掘り下げた。)

⑥ この前、日程に余裕のないため、また、B地区内住居址未発掘の時点故、C地区の発掘作業をも併行した。この地区出土の土器破片とB地区のものとを比較検討し、遺跡の時代区分を縄文中期の中頃から後半にかゝるものと推定する。なお、復原作業後、土器器形、文様等を検討して正確を期することにする。

⑦ D地区も現地文書の上、つほ掘りを行う。

しかしながら、出土の土器破片少なく、基盤までの深度が深いことが

わかる。包合層が再堆積のものか、単一の層であるか、層状の層であるか、他地区についても検討を要し、層序記録にたよるも判明しがたい。

(※) 昨日からトレンチを入れていたB地区中央部やや南寄り、生活面と甕しき深さまで掘り下げる。付近から大きな石が数個出土するも、すでに、本発掘以前に移動していたものと識別され、石の位置が攪拌された形跡濃厚なることが感覚的にとらえられる。したがって、生活面が越層になっているか確認できぬまま作業続行。(この点については、最後まで未確認に終る。)たゞ、B地区各所における出土土器の埋没深さが、さらに深いことから、生活面が一段下にあるものと推定し、掘り下げる必要性あることに意見一致。

この部分の西側延長、土層観察用のあぜに、炭化物が広がっていることから、このあたりの調査作業を集中的に行うことにする。

(この炭化状態の意味については、不明のままに終るも、これが手がかりとなって翌日の炉跡の発見へと結びついたものと思う。)

次の諸点について話し合う。

- ① 破壊箇所への識別に悩み、充分な成果の得られぬことから、調査範囲を広げ過ぎ、若干ながら慎重性を欠いたのではないか。例えば、すでに移動していたとはいえ、石の位置を正確に記録し考察すべきであった。(これは、後で柱穴との関連性を考える際に、住居構造解明のために必要となった。)
- ② 掃土のための土壁が狭い故、炭化状態部一帯の作業が困難であった。翌日は、この床面を下げること。
- ③ スケッチ、写真撮影はできていても、土器埋没角度の測定調査で手抜かりがあった。
- ④ 翌日は、必要部分だけ、必要な時点であぜの土を除去すること。

8月5日(月)

前日の作業続行。B地区中央部だけに作業箇所を限定して、床面を下げると共に、必要部分だけあぜをはずす。土器破片、石器等採集物少なし。

調査予定終了間近かき日暮れ時、深度約95cmのところより石囲み炉の一部を検出。この炉跡を発見した状況について、生徒作文「発掘に

参加して」より、次に記す。

「先生に言われ、土器を取り出す作業に力を注いだ。土器採集後、地盤を少し下げるため、また掘り始めた。一つ、二つ、三つと長い石やシヤベルでなでるとぼろぼろともろくこわれる石などが出てきた。何か意味ありげな石。私たちは、それを残し、他の所を掘っていたら石と石との間に、炭化物。これは！と思い、岡崎先生を呼んで見てもらった。先生は「たいしたことなかる、でも、まだ掘ってみられ。」この言葉に答え、私たちは掘っていった。そして、石の並び方が長方形らしい形をしているのに気づき、先生を呼んだ。他の人々もいつせいに集まってきて炉跡ということになった。そして、住居址の柱穴をさがそうと、みんな一生懸命。私は、「もし、住居址が出てこなかったら、むだ骨を折ってしまう。どうか出てくれるように……」と思いながら掘り続けた。」

炉跡を半分ほど検出。炉の内部には手をつけず、周辺の炉跡部分を完全に検出。そのため壁面を掘りくずさなければならなくなった。しかし、そこは掘り出した土を盛った埴土面所致、作業続行不可能。後日さらに、住居址の柱穴部分を検出することにして作業中止。オー日目にトレンチを入れた部分の砂埋め戻し作業を行う。

8月11日(日)

中止していた作業を行う。上屋の構造を想定しながら、どのあたりに柱穴が予想できるかを考え、どのあぜをどの順序ではずすかを検討。住居址の全体をできるだけ検出するためには、掘り上げた盛り土が妨げとなるので、排土の移動作業から始める。しかし、本来、その竪穴と無関係の穴を柱穴と誤認してはいないか心配しながら作業をすすめる。さらに数個の柱穴を検出。また、農道に近い土壌の意味について、住居址の壁に結びつくものかどうか検討。

遺物を含んでいない老山まで掘り下げ、炭化状の竹製品を検出。遺構土器等との関係を見きわめるべく努力す。年代測定の試料として耐えうるものかどうか、後日、検討することにする。

折り返しく、午後、雨。作業中止。

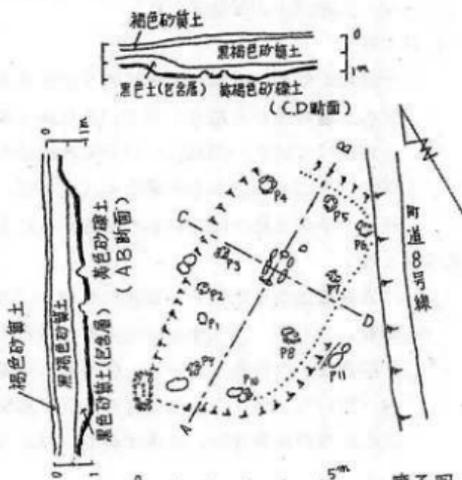
8月18日(日)

柱穴の検出作業再開。住居址のかなりの部分を検出。(柱穴の傾斜と

住居址の構造

この台地にはローム層(砂質粘土層)がなく、表土の下の褐色土層について黄色を帯びた砂層となっており、その下に礫層がある。砂層までの厚さは30~50cmで、砂層の上の褐色土層中に黒色の遺物包含層が含まれる。住居址はこの砂層を30~40cm掘り下げた整穴住居で、長方形に近い平面をもっている。柱穴は床面から20~30cm掘り下げたあり、周囲に小石が埋めてあるものが多い。これは床が砂地で柱をたてても不安定なためであろう。そのため柱穴の底や柱穴周辺の底面に大きな石を置いている場合も多かった。柱穴と思われるものが全部で10個あったが、そのうちP₁(第3図)は周囲に小石を埋めこいで土を塗った形跡があり、P₁₀は石が穴につまったような形であられた。P₂~P₈の7個はちよつと炉を囲むような状態にあるので、これが主体をなす部分であろう。それに対してP₉、P₁₀の両の中はヤヤセばまっている。P₁₁はかなり大きなピットである。あるいはこの中に斜にたてかけた屋根の柱を置いたかと思つたが、その他の周辺にはなお調査が不充分である。このピットの中から多くの石屑が出した。

炉は長さ約1.00m、中約40cmの長方形で、周囲を石で囲んでいる。炉の内側からは微細な骨粉が土にまじっていることが発見された。周囲の石には焼けたあとがあるが、床には砂層のためか焼土のあとがはっきりしなかつた。



第3図

周囲の壁が垂直ではなく、やや斜に塔ちこんでいるのは砂泥のためであろう。そのうち北側の壁(×る図)はこくに傾斜がゆるやかで、不整形な面に大きな自然石が数個置かれていた。これは以前の採掘の際に乱されたことも考えられるがその北方の当時の地表面(砂層の上面)に砕礫を敷いたかと思われる部分があり、出入口であったことも充分に考えられる。

床面では、上の包含層と下の砂層とが明瞭に分離された。これは他の箇所では漸移層となっていて不明瞭であるのと対照的であった。また床面の砂層の上に厚さ1~2cmの固い部分(包含層と同じく黒褐色)があり、注意して掘ることによって上の包含土層とは区別できた。こくにP₁の周囲に貼りつけたように現われた土はこの部分と連続しているように見え、これらによって一度地山を整形してから、更に土を敷いて床面としたことが考えられた。これは地山が砂質であるための特色とも考えられる。

床面は東北から西南にむかって20cmばかり傾斜しており、東北中央の柱穴P₁の存在と共に入口が反対の西南側にあつたことを思わせるものがあつた。

遺物

土器はまだ整理されていないが、近隣の地から掘り出された但田氏所蔵の土器群とはほぼ同じころのものであろう。氏の努力によって復原された20数頁の土器の中には、深鉢、台付鉢、浅鉢、皿などが大小さまざまなみられ、井波町の某助知家の復原資料とともに貴重な資料をなすものである。これらの土器は小島俊彰氏によれば、後中期半の古舟式に属するものであろうとのことである。今後の土器の整理によって、これらの土器群との関連や、その特色が明らかにされることを期待するものである。

石器は磨製石斧も打製石斧も数点ずつで、極めて少なかった。石鏝も10点ばかりで余り多いとはいえなかった。石屑はかなり発見されたが石鏃や石匕などは一葉も発見されなかった。

その後の経過と現状

遺跡

発掘された住居跡保存のため、降雪期を迎えた昭和43年暮れにいたり、雪に

よる破壊を防ぐため、上屋を設置した。しかし、年が明けて雪どけになると共に雨によつて土砂が流入したり、子供の遊び場となつたり、あるいは心なき見学者の闖入を見るに至り、その跡は着しく荒らされるにいたつた。その上、決定的なつたのは、長い間地下に埋もれていたこれらの遺跡が、急に風化にさらされるようになったため、炉跡石などの破壊作用が急速に進みはじめた。これはわれわれが予測していなかつたことでもあり、早急にその応急処置を迫られるにいたつた。

そこで、昭和44年8月に至り、これら損傷箇所の一部を修復し、全域に庄川の築物の砂を運搬して、全面的にこれを埋めた。思えばこれらの炉址は5000年の間地下に眠りつづけていたが、日の目を見たのは約一カ年にして再び埋蔵文化財として地下の宝となつたのである。

○遺物

発掘された縄文土器は、庄川中學校に保管してあり、その整理は同校地歴クラブの手によつて進められている。完全なものは殆んどみられないが、前記岡崎卯一先生の御指導と同校の協力によつて、復元可能なものについては、着々とその成果が上がっている。

また、同校地歴クラブによつて、実測図の作成、紋様の拓影についても作業が進んでいて、他地域との比定のもとに後日、これを集大成できる機会のあることを望むや切なるものがある。

今後の向題点

本遺跡松原地内は、その遺構並びに出土遺物からみて、発掘調査の現段階においては、縄文時代中期のものとして推定されている。しかし詳細に涉つては今後の研究に俟つべき点が多く、次に略記するところは今回の調査によつて判明したと考えられるものの一部であることをお断りする。

- ① 調査の開始より予想された住居址が、ほぼ完全な形で確認できたこと。今回明らかとなつたB地帯住居址に隅丸方形を呈す竪穴式住居址(炉と柱穴検出)であり、入口近くと竪しき箇所には敷石部分が検出されている。

これらについては、今後、別の住居址が発見された際、比較検討されることによつて、より正確に意義づけをなされるであろう。なお、当該住居址に關する學術上の位置づけについては、他日、発掘調査報告書に於いて明らかにされるもの

と想う。

- ② 今回、住居址が確認されたことから、今後に予定される調査で、数多くの住居址が発見される可能性が強く、遺物散布状況調査とあわせて、本遺跡の集落規模・形勢がより正確に推測できるようになるものと考える。
- ③ 写真撮影・調査記録等により、出土遺物の状況が明瞭になり、加えて層序調査により、生活面の想起がより確実となった。したがって、現庄川流路形成以前の時代について十分ならざるも研究の手がかりが得られたものと考ええる。
- ④ 出土遺物の中心は、可能な範囲で採集された年代測定を試料が採集されているため、従来からの出土品との比較検討により、明らかにされる量が少なくなれるものと考ええる。

む す び

B地区の発掘中、南半はすでに土層採集のために掘りかえされたことが知らされ、包含土にも攪乱のあとが明らかになったため一時落胆させられたが、幸い床面がほぼ完全にのこっていたことは喜ばしいことであった。住居址の周壁がほぼ完全にのこっていた例としては、富山県で最初であろう。

この調査で住居址は砂層が一段と深く掘りこまれたところにあり、その付近には濃密な原色包含層があることが明らかとなったが、このような場所がB地区では東北端に1ヶ所、発掘された住居址の南方に接して1ヶ所あり、未調査に終わっている。

今後数年をかけて遺跡の分布状態を広く調査し、要所要所を発掘調査したいとも考えている。なお発掘した住居址の保存についても熱心に研究中である。

追 記

本報告書作成に当り、田崎卯一氏(大境マ4号)、福垣不二男、前田 淳、面氏(砺波地方史研究、マ2号、マ6号)の論文を各所に引用させていただいた。